

# ポポフ ニュース 16

2009年6月号

No.



ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立された NGO (非政府・非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を聞いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが制作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思っています。



4月には国立公園周辺の子供たちです。

- 6月15日  
●「野生ゴリラの実情と保護活動」(山極寿一) 動物園飼育の集い サンパーク犬山(犬山市)
- 6月16日  
●「霊長類学へのいざないー私の愛したゴリラ」(山極寿一) 京都府立洛北高校生命科学I特別講義 洛北高校(京都市)
- 8月25日  
●「ゴリラからみた暴力と音楽の由来」(山極寿一) 法然院夏の夜の教室 法然院(京都市)
- 11月9日  
●「ゴリラから学ぶ家族と父親の起源」(山極寿一) SMBCパーク栄<生物多様性セミナー> SMBC栄パーク(名古屋市)
- 11月10日  
●「家族の起源ーゴリラの育児から見た人間の家族と育児ー」(山極寿一) 子育て市民講座 神戸市産業振興センター
- 11月15日~18日  
●「サガシンポジウム「ポポフの活動紹介」 東京大学・多摩動物公園(東京都)
- 12月16日~21日  
●「PolePole基金を応援する展覧会ーコンゴの人とゴリラのためにー」 堺町画廊(京都市)

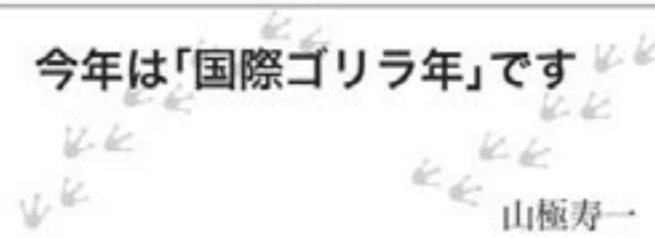
- 1月24日  
●「世界遺産の森から学んだことーアフリカと屋久島を訪ねてー」(山極寿一) 鹿児島環境学シンポジウム 鹿児島大学稲島会館(鹿児島市)
- 2月22日  
●「私が愛したゴリラとアフリカの紛争」(山極寿一) 第3回対アフリカ人道支援セミナー「アフリカ支援への多様な視点」 神戸国際会館(神戸市)
- 2月27日  
●「ゴリラと会話するために」(山極寿一) 京都新聞「ソフィアがやってきた」 京都市立神川小学校(京都市)
- 3月24日  
●「コンゴ河流域熱帯雨林における人と動物の共生」(山極寿一) JICA公開シンポジウム「アフリカコンゴの森を守れ! コンゴ河流域熱帯雨林保全シンポジウム」 JICA研究所(東京)
- 4月29日  
●「アフリカの森でゴリラが教えてくれたこと」(山極寿一) 上野動物園国際ゴリラ年イベント 上野動物園(東京)
- 5月18日  
●「ゴリラと子どもたち」(山極寿一) 森の子クラブ20周年交流会 法然院森のセンター(京都市)
- 5月18日~20日  
●「ゴリラカフェ」 ポポフグッズの展示と販売 堺町画廊(京都市)
- 5月20日  
●「ゴリラ先生と京町家」 対談:山極寿一・松井薫 堺町画廊(京都市)



収入		支出	
昨年度よりの繰越金	449,535	ニュースレター印刷費	36,750
講演会・シンポジウム カンパ	43,056	ニュースレター・ホームページ作成費	20,000
展覧会売上	297,401	ポポフグッズ材料費	68,138
作品売上寄付	46,776	郵送料	41,340
ポポフグッズ売上(現金)	284,788	ポポフへ送金	1,199,770
寄付(現金)	173,062	次年度へ繰越金	1,072,283
売上・寄付(郵便振替)	1,143,214		
受取利息	449		
計	2,438,281	計	2,438,281

「ポポフ基金」NPO団体等寄付システム」から、寄付金をいただいています。

## 今年は「国際ゴリラ年」です



山極寿一

昨年の12月1日にローマで開かれたボン条約の締結国会議で、今年を「国際ゴリラ年」にすることが宣言されました。ボン条約とは国境を越えて分布域を持ち移動する性質を持つ野生動物種の保全に関する条約で、現在世界で110カ国がこの条約を批准しています。国連環境計画UNEPのなかにある大型類人猿保護計画GRASPや国際動物園水族館協会WAZAも協力して、世界中でゴリラの保全について考え実行していこうとしています。

ゴリラは今、さまざまな理由で絶滅の危機に瀕しています。まず、ゴリラの生息地である中央アフリカの熱帯雨林が大規模に伐採されることによって、すむ場所を失っています。伐採道路が森林の奥深くに延び、伐採が終わった村がそのまま放置されることによって、人々は現金収入のすぐ得られる野生動物の肉を都市へと運ぶようになり、ゴリラもこのブッシュミート取引によって各地で狩猟の対象にされるようになりました。それに拍車をかけたのが、近年になって頻発している内戦です。それまで保護区として守られていた場所も兵士や難民が入り込むことによって大きく破壊されました。金、ダイヤモンド、コルタン(携帯電話やパソコンに使われている特殊な金属)の採掘に人々が押し寄せ、その場しのぎの食料としてゾウ、バッファロー、ゴリラなどの大型動物が狩られるようになりました。さらに、コンゴやガボンではエボラ出血熱という伝染病がはやり、ゴリラが次々に倒れて集団ごと消滅していきました。何か早急な手を打たねば、急速にゴリラは姿を消してしまいます。

世界各地で、今どうしたらゴリラを救えるのか、多くの人々が考えようとしています。ポポフもこの機会を利用してカフジ・ビエ国立公園で住民集会やシンポジウムを開こうと企画しています。とくに、地元の子どもたちにゴリラの大切さを教えようと思っています。日本でもさまざまな試みが企画されており、私たち日本支部でも5月に「ゴリラカフェ」を京都で3日間にわたって開き、「ゴリラにとって森林は、私たちににとっての町家のようなものだ」という談話会を催しました。まだまだいろんな企画をしていこうと思いますので、何かいいアイデアがあればお寄せ

ください。少しでも多くの

ゴリラが生き残るため

に、ゴリラたち

と人間がとも

に幸せに共

存できるため

に、何が

できるかを

今年一年

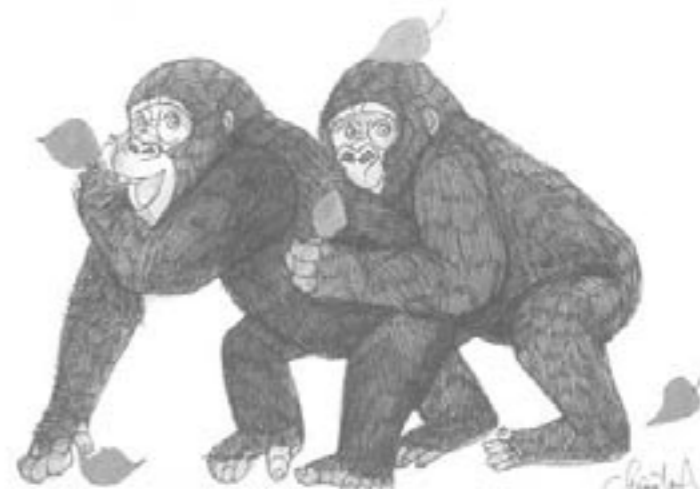
いっしょに

考えましょ

う。



▲河部知雄画



▲河部知雄画

## 近刊案内

- 山極寿一著・田中豊美画 ぶんけい  
『ゴリラ図鑑』
- 山極寿一著 裳華房  
『人類進化論ー霊長類学からの展開』
- 安深真子著 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
『森と人との対話ー熱帯アフリカ・コンゴラ人の暮らしの植物誌』
- 国松俊英編 ポプラ社  
『ゴリラをたずねてアフリカへ』
- 西田利貞著 東方出版  
『チンパンジーの社会』
- 長谷川真理子編著 文芸社  
『ヒトの心はどこから生まれるのか』
- 高橋成紀・山極寿一編 東京大学出版会  
『日本の哺乳類学2 中大型哺乳類・霊長類』
- 伊沢結生 どうぶつ社  
『野生ニホンサルの研究』
- 並木美砂子 風間書房  
『子どもが動物に出会うとき』
- 中川志郎 ワック  
『パンダは誰めて子を育てる』
- 中村美知夫著 中公新書  
『チンパンジー:ことばのない彼らが語ること』
- 奥野克巳・椎野若菜・竹ノ下祐二共編 春風社  
『セックスの人類学』
- 鎌田浩毅著 文春新書  
『世界がわかる理系の名著』
- 鎌田東二著 角川学芸出版  
『聖地感覚』
- 林良博・森祐司・秋篠宮文仁・池谷和信・奥野卓司編  
『ヒトと動物の関係学第4巻「野生と環境」』 岩波書店
- 野生生物保全論研究会編 緑風出版  
『野生生物保全事典』
- 横茂樹・砂野幸穂編著 三元社  
『アフリカのことばと社会ー多言語状況を生きるということ』
- 黒島英俊著 ポプラ社  
『オランウータンのジブシー』
- 渡辺一夫著、亀井伸孝監修 ポプラ社  
『体験取材 世界の国々42「カメルーン」』

## 日本の皆さんへ

ジョン・カヘークワ

ポポフにとって日本の皆さんとの関係は、1992年の設立以来とても重要なものとなっています。設立当初より、ポポフ日本支部からはさまざまなご支援を賜り、カフジ・ピエガ国立公園周辺で暮らす住民や公園内で働くスタッフの家族の暮らし、及び子どもたちの教育が大きく改善されたことを大変ありがたく思っています。その結果、ポポフは保護区の周辺で住民の手で設立された NGO としては、とても長期にわたってその活動を力強く推進している団体として知られるようになりました。内戦や数々の混乱による不安な状況にも関わらず、ポポフが活動している村々では人々はとても幸せそうで、国立公園の存続とゴリラの保護を熱望するようになっています。それは保護区を維持することによって支援を得られ、家畜や学校や病院などを築っていくことができるからです。このことは逆に、ゴリラを保全し国立公園を存続させるためには地元のコミュニティの協力が必須だと言えるでしょう。



▲ポポフの中学校クラスで学ぶ子どもたち



▲ビデオのゴリラの映像を見る子どもたち



▲発電機の試運転



▲苗木を植える生徒たち

昨年、山極さんとバサボセさんのお誘いで、私は国際霊長類学会に加入しました。そして、昨年8月にイギリスのエジンバラで開かれた第22回国際霊長類学会学術大会に参加しました。世界中で行われている霊長類の研究や、私たちと同じように霊長類の保全を目指す多くの人々と知り合い、とても貴重な交流をすることができました。この出張にもポポフ日本支部からの支援金の一部を使わせていただきました。ここに記して深く感謝いたします。

昨年の9月に開講したアンガ・ポポフ学校は今年の6月まで続き、まもなく夏休みに入ります。かつて公園の存続に反対し続けていた親たちのほとんどは、この学校のおかげで、より良い環境を保全していかなければ次世代に望ま



▲ポポフの小学部の子どもたち

い未来はないと考えるようになりました。これらの親たちや現在公園の仕事をしている人々は、子どもたちをアンガ・ポポフ学校の農林部門で学ばせることに情熱を燃やしています。1999年にオープンした幼年部は3つのクラスに、2004年にオープンした小学部は6つのクラスに加え、また2002年に1クラスで始まった中学部はもうたくさんの生徒であふれるようになりました。現在、合計450人を超える生徒が毎日この学校に通って環境について学習しています。教師や用務員、警備員など17人の人々がこの学校で働いています。ポポフ日本支部から送られてくる支援金は、こうした学校の教材や設備、人々への給料として使わせていただいています。とくに、ポポフ日本支部からの支援によって購入した発電機と映写機は、子どもたちに生きたゴリラの映像を見せる上で大いに役立っています。おかげで私たちが実際に森の中で撮影したゴリラの映像を見せることができ、子どもたちはとても熱心にゴリラの姿や行動に見入っています。これから環境教育に大いに役立つと期待しているところです。

昨年、山極さんとバサボセさんのお誘いで、私は国際霊長類学会に加入しました。そして、昨年8月にイギリスのエジンバラで開かれた第22回国際霊長類学会学術大会に参加しました。世界中で行われている霊長類の研究や、私たちと同じように霊長類の保全を目指す多くの人々と知り合い、とても貴重な交流をすることができました。この出張にもポポフ日本支部からの支援金の一部を使わせていただきました。ここに記して深く感謝いたします。



▲ポポフ日本支部の皆さんありがとう!!

## カフジ・ピエガ国立公園のゴリラの歴史

ジョン・カヘークワ

長い間、ゴリラにとって最大の敵は私たち人間でした。最近では、1996～97年、1998～2003年に起こった二つの内戦が、カフジ・ピエガ国立公園に生息するヒガシローランドゴリラに大きな打撃を与えました。多くのゴリラが食料として殺され、残った何頭かの赤ん坊も捕らえられて売られて行きました。1996年に山地林部で254頭と推測されたゴリラは2000年には130頭に減ってしまいました。それまで観光客を受け入れていた人馴れした集団のシルバーバックはほとんど殺され、メスや子どもたちは散り散りになりました。比較的よく保全されていた山地林部でさえこのありさまなのです。内戦中全く放置されていた低地林部ではさらにひどい状態だったと予測されます。1994年に13,000頭の生存が見込まれた低地部には、今では2000頭以下のゴリラしか生き残っていないだろうと思われるのです。

カフジ・ピエガ国立公園は、世界で初めて野生のゴリラを観光目的で人に慣らすことに成功した場所です。それを試みたのは、アドリアン・ディスクリベールというベルギー人です。彼は1939年にベルギーのブリッジュスで生まれ、9歳のときに公園近くのミティという村にある農場へ移り住みました。少年時代、毎日アドリアンは森の住民ビッグミーの子どもたちと遊んで暮らしていたのです。彼は誘われるままに森に入り、「自然のコンパス」をもつビッグミーたちから森歩きを習ったのです。その頃の遊び仲間だったピリピリ・プルシとパトリス・ミシェベレは、やがて青年になったアドリアンとあるゴリラの集団に森でたびたび出会うようになります。ゴリラが地元の人々に狩猟されているのを見たアドリアンは、ゴリラたちを守るうと保護区の設立をコンゴ政府に要請します。ベルギーに留学していたコンゴ人の学生ルリュマ・アンドレやスカリ・ガストンも協力して多くの人々に呼びかけ、政府に請願の手紙を出しました。

4年後の1970年に、その努力が実って国立公園が誕生しましたが、それまでにアドリアンたちは一つのゴリラ集団を人に馴らすことに成功していました。この年、ベルギーから来た最初の

観光客がゴリラを訪問したのです。アドリアンはこの集団のシルバーバックに、当時ゴリラの研究にやっていたドイツ人の研究者マイケル・カシミールの名を取って、カシミールと名づけました。1972年には別のゴリラ集団を馴らし、それを率いていたシルバーバックにはムシャムカ(地元のマシ語で賢老人という意味)と名づけました。1974年には、孤児となって保護されたメスの子どもゴリラにジュリーという名をつけ、カシミールの集団に加入させようと試みました。残念ながらジュリーはこの集団との相性が悪く、10日後に風邪をこじらせて死んでしまいました。この様子はフィルムに収められ、記録映画として公開されています。

ヴィルンガ火山群でマウンテンゴリラと友達になったダイアン・フォッシーと同じく、アドリアンもカフジのゴリラたちを人間に馴らすと努力しました。でも、その方法はダイアンとは違っていました。ダイアンがゴリラのまねをして4つ足で這い、ゴリラの声を出しながら近づいたのに対して、アドリアンは二足で立ち、シルバーバックのカシミールの目をじっと注視しながら近づいたのです。そして、母国語のフレミッシュの言葉で、「コムコムコム、カシミール」と呼んだのです。最初カシミールは立ち上がって、不思議そうにアドリアンを見たそうです。でも大胆なアドリアンの態度にカシミールは怒って、何度も突進して脅すようになりました。カシミールが宥和的なしぐさでアドリアンに近づき、そのシャツを引っ張って破るようになるまで4年の歳月が必要でした。こうしてカシミールはアドリアンに馴れ、やがて訪問する観光客にも優しい態度を示すようになりました。以来、カフジのゴリラツアーのガイドたちは、ゴリラの目を見ながら近づき、「コムコムコム」と呼びかける方法を実践しているのです。



▲デビッド・ビシームフ画

## ムファンザーラの死

ドミニク・ピカバ

大変悲しいニュースをお伝えしなくてはなりません。まだ人付け途中だったシルバーバックのムファンザーラが死亡したという報告が入りました。今年の3月26日にカフジ・ピエガ国立公園をパトロール中の監視員たちによって発見されたとき、ムファンザーラは顔を地面につけてうつぶせに倒れており、すでに息がありませんでした。場所は標高2,270メートルの二次林で竹林のすぐ下部です。前日にムファンザーラ集団を訪れた監視員たちは、ゴリラが奇妙な声で鳴っていたと報告していますが、他の集団が近づいたり、危険な動物が近づいたりした様子はありませんでした。また、ムファンザーラの死体の周辺に争ったような跡がなく、死体に傷もないことから外傷による死ではないことは明らかです。

そこで、28日に獣医のチームを招聘し、ムファンザーラの死体の病理解剖を実施しました。その結果、肝臓に大きな腫瘍があり、これが死の直接の原因だったことが明らかになりました。どうやらムファンザーラはずいぶん前から肝臓に腫瘍を持っていたらしく、これがだんだんと進行して死に至ったようです。自然死であり、恐ろしい伝染病ではないと聞いてほっと胸をなでおろしているところです。このあたりはかつてエボラ出血熱が発生したことがある地域で、隣国ルワンダの火山国立公園ではインフルエンザの流行によって何頭もゴリラが死んでいます。もしこういった感染力の強い、致死性の高い病気だったら、またたくうちにカフジのゴリラの大半が倒れてしまうでしょう。そういった事態ではなく、緊急の対策を打つ必要はないということでもひとまず安心したところです。

病理解剖の際に、身体計測を行ったので、参考のために報告しておきます。体重は重すぎて測れず、解剖の際に各部位を切り離してしまったので、正確な測定はできませんでした。おそらく150キログラムは優に超えていたと思います。頭部の周囲は67センチメートル、胸囲は132センチメートルありました。腕の長さは右腕が115センチメートル、左腕が116センチメートル、脚の長さは右脚が98センチメートル(腰から

くるぶしまで76センチメートル)、左脚が97.5センチメートル(69センチメートル)でした。左右の脚の長さが違っていたことに驚きました。足の大きさも右が27.5センチメートル、左が25センチメートルでした。左足の発育が何らかの理由で妨げられていたと思われます。ムファンザーラはまだ年も若く、シルバーバックになってあまり年月が経っ

ていません。おそらくこれから体重を増やし、身長を伸ばしてさらに大きなシルバーバックになっていく途中だったと思います。残念ではありますが、自然死なのでこれも彼の運命だったのでしょうか。安らかに眠ってほしいと思います。



ゴリラたちの近況

山極寿一



チマヌーカ集団の子供たち

ドミニクさんの報告にあるように、ムファンザーラ集団は3月にリーダーのムファンザーラを失いました。昨年に比べて赤ん坊の数が1頭増え、子どもだったゴリラが若者に成長しましたが、メスの数は変わっていないし、まだ集団を率いていけるオスは育っていません。今のところ、集団はバラバラにならず、メスや子どもたちがまとまって暮らしていますが、今後どうなるか全く見当つきません。これまでリーダーを失った集団は、メスが離れていくか、新しいオスがやってきてリーダーになる、という二つの道のどちらかを選択しています。全くオスが不在のままメスと子どもたちだけで集団を作っていた例は最長で27ヶ月間。おそらくムファンザーラ集団もしばらくはオスなしで暮らしているでしょうが、そう長続きするとは思えません。オスのいない集団が他の集団と遭遇したり、メスが赤ん坊を連れて他の集団に移るとき、他集団のオスによって子どもが殺されることがあります。ムファンザーラ集団がこれからどう変わっていくのか、楽しみでもあり不安もいっぱいといったところです。

独り立ちし、彼の元を去っていきました。今彼は、かつて父親のムシャムカが遊動していた地域に腰をすえ、時折やってくるチマヌーカ集団やマンコト集団と出会うとメスを誘惑しに出かけます。また好ましいメスといっしょになって、自分の集団を構えてほしいものです。

マンコト集団には、ムガルカと長い間いっしょにいたルシャシャというメスがいます。いったんチマヌーカ集団に移り、それからマンコト集団にやってきました。昨年はマンコト集団にも2頭の赤ん坊が生まれました。やっとマンコトも父親としての能力を発揮できそうです。楽しみです。

そのほかにもピリンドゥフ集団に赤ん坊が1頭生まれ、カフジのゴリラの集団は順調に数を回復しつつあります。4年に1回しか出産しないゴリラが急速に数を増やすことは無理ですが、毎年生まれてくる赤ちゃんがすくすくと成長できるように暖かく見守って生きたいと思います。

▼カフジ・ピエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13歳以上	8-12歳	8歳以上	6-8歳	3-6歳	0-3歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		17		3	11	32
ピリンドゥフ	1		3		3	1	8
ムファンザーラ			8	4	1	5	18
ランガ	1		5		1		7
ムブングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8		2	2	13
マンコト		1	12	1		2	16
無名	1	1	10			3	15
合計	7	2	69	5	10	24	117

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810-1-90217、加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新製品です。

- ☆ポポフ絵はがきセット(10枚組) 1000円
- ☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット(5枚組) 600円
- ☆ヒガシローランドゴリラ・ペンダント 2200円
- ☆ヒガシローランドゴリラ・キーホルダー 2200円
- ☆ポポフペンダント 1200円
- ☆どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り) 3000円
- ☆ケイタイ・ストラップ(ポポフ) 1200円
- ★ポポフエコバック 1500円
- ★ポポフ2010年カレンダー(予約販売11月頃配布) 1000円



▲ポポフ絵はがきセット



▲東ロランドゴリラ・ペンダント・キーホルダー



▲どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り)



▲ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット

2010年  
ポポフカレンダーを作ります。  
200部限定  
見開きA4サイズ  
1部1000円(送料込み)  
発売開始 11月

ゴリラの写真や絵がいっぱい!!

予約を受け付けます。  
ポポフグッズと同様、  
郵便振替でお申込下さい。



▲ケイタイ・ストラップ(ポポフ)

催しのご案内

- 6月23日~28日 ●ポポフ写真展「国際ゴリラ年を考える」 堺町画部(京都市)
- 6月27日 ●いしいしんじ「その場小説」 参加費：1000円 堺町画部(京都市)
- 6月28日 ●山極寿一「ゴリラの記憶とポポフの活動」 参加費：カンバ制 堺町画部(京都市)
- 11月14日~15日 ●第13回サガシンポジウム 至津の森公園・北九州市立大学(北九州市)  
ポポフの紹介とグッズ販売を予定しています。
- 12月15日~20日 ●「PolePole基金を応援する展覧会—コンゴの人とゴリラのために—」 堺町画部(京都市)



## 太陽と月と雨のはなし

語り手：Malashi

太陽と月と雨は、同じ母から生まれた兄弟でした。父も同じでした。それぞれが成長すると、親もとを出て自分で暮らすようになりました。

月日がたち、父はたいへん年老いて、死の床にありました。父は雨を呼んで言いました。「おまえはまだ若いので私の近くに残っていたが、年かきの兄弟の太陽と月を呼んで来てくれないか。わたしは死ぬ前に話しておきたいことがあるのだ」

雨はいちばん年上の太陽のところへ行きました。

雨は「父さんが死にそうなんです。今すぐ会いに行ってください」と、たのみました。

すると太陽は「わたしは今、畑仕事があってとても忙しいんだ。今日は行けない、明日にしてくれないか」と言いました。

雨は月のところへ行きました。雨は「父さんが死にそうなんです。今すぐ会いに行ってください。待っておられます」と言いました。しかし、月は「わたしは畑の木を切ってきたところなんだよ。すっ



かり疲れてしまったから、少し休まなくちゃ。またそのうちに行くよ」と答えました。

雨は父のところへもどり、太陽は畑の仕事が忙しいので明日行くと言い、月は畑仕事を終えたばかりなので休んでから行くと言い、だれも自分といっしょに采なかつたことを伝えました。

「何て心残りなことだ。わたしはもうながくはないのだ。采なかつた者たちには

何も残さないが、おまえには兄弟たちの口を封じる力を残してやろう。わたしの死後、もしおまえが太陽や月と言い争いをして、腹をたてることがあれば、太陽と月はもう二度と話すことができなくなるだろう」そう言うと、父は亡くなりました。

それからというもの、昼間明るく照っている太陽も、雨が降りだすとかくれてしまいます。夜こうこうと輝いている月も、雨が降りだすと見えなくなってしまう。

そんな訳で、雨は太陽や月をしりぞける大きな力を持ったのです。それは太陽と月が、父の死ぬ前の願いに従わなかったからです。

これでこのお話はおしまい。

訳/監：佐原節知子

## ポポフのホームページ

HYPERLINK

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ピエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、デヴィッド・ビシームワが製作した絵ハガキも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部

お願い：ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。